

一 般 演 題 抄 錄

16. 良性膵疾患に対する膵頭十二指腸切除術の検討

野村 秀明 西松 信一 竹本 雅彦
園部 鳴海 上田 省三 堀 裕一
黒田 大介 保田 知生 河村 正生
窪田 昭男 加藤 道男 大柳 治正

近畿大学医学部第2外科学教室

目 的

1978年に Traverso & Longmire らが、全胃幽門輪温存膵頭十二指腸切除術 (PPPD) を発表して以来、従来の標準膵頭十二指腸切除術 (PD) に比べ、より非侵襲的であることから、本法が良性疾患に対する標準術式となりつつある。PPPD の利点は、小胃症状の改善のみにとどまらず、消化液、消化管ホルモン分泌障害の軽減や残膵機能低下の防止傾向がみられるため、長期予後よりみた患者の Quality of Life (QOL) を改善する可能性が指摘されている。今回、良性膵疾患を対象として全胃幽門輪温存術式の妥当性を、代謝、栄養面から検討した。

対象及び方法

過去10年間に、良性膵疾患に対して行われた膵頭十二指腸切除術13例 (PD 9例, PPPD 4例) を対象とした。栄養評価として用いた BIA (bioelectrical impedance analysis) は、50 kHz 800 μ A の交流電流を使用し、4電極法により測定した。

結 果

膵頭十二指腸切除術を、術式別に比較すると、出血、輸血量、術後早期の合併症に関しては、PPPD の方が、少ない傾向にあった。術後在院日数は、両者に差はなく、胃管留置日数、

絶食日数は、PPPD 群で有意に長かった。術後1か月における体重、血清コレステロール値の変化率は、PD にくらべ、PPPD の方が減少率は少なかった (0.93 vs 0.99, 0.72 vs 0.81) が、有意な差はなかった。しかし、外来にて経過観察しえた11症例について、BMI (body mass index) PS (performance status) 及び BIA を比較すると、PPPD 群では、BMI は増加しており、PD 群との間に有意差をみとめた (0.92 vs 1.04)。また、PS も、PPPD 群では、0.25とすこぶる良く、PD 群 (1.14) との間に有意差をみとめた。BIA は、体脂肪率では、両者に差は認めなかったが、body cell mass と逆相関を示す exchangeable Na/K 比では、PPPD は低値をとり (1.238 vs 1.476)、また電流と電圧の位相差のズレによりコンデンサーとしての細胞膜機能を表す phase angle は、有意に増加していた (6.146 vs 4.971, $p < 0.05$)。

結 論

(1) 良性膵疾患に対する膵頭十二指腸切除術は、13例に行われた。(2) 良性膵疾患に対する膵頭十二指腸切除術は、安全に行うことができ、(3) 特に PPPD は、術後長期の栄養状態、細胞機能の観点から、優れており、良性膵疾患に対しては、妥当な術式であると思われた。